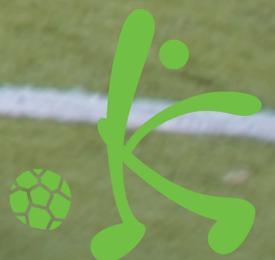


We Start Kids' Programme

JAPAN FOOTBALL ASSOCIATION

!!



DREAM
BY ASSOCIATION

財団法人日本サッカー協会

JFAキッズプログラム



こどもたちは我々の“財産”

さあ、始めましょう!

大飼 基昭 • (財)日本サッカー協会 会長
Motoaki INUKAI

日本サッカー協会（JFA）が重点的に取り組んでいる施策のひとつに「JFAキッズ・プログラム」があります。このプログラムは、外で遊ぶことが減った現代の子どもたちに遊びや運動を通じて健康な身体づくりを行いながら、チームワークやスポーツマンシップなどを育ててもらおうという取り組みで、現在、すべての都道府県協会が地域のキッズを対象に、楽しいイベントを展開しています。既に年間延べ何十万人もの子どもがこのプログラムに参加し、スポーツの面白さや大勢の仲間たちと遊ぶ楽しさを体験しています。

近年、外遊びが減ったことにより、体力の低下、生活習慣病の低年齢化などが進んでいます。また、すぐにキレル、集中できない、ひきこもるといった問題を抱える子どもも増えています。

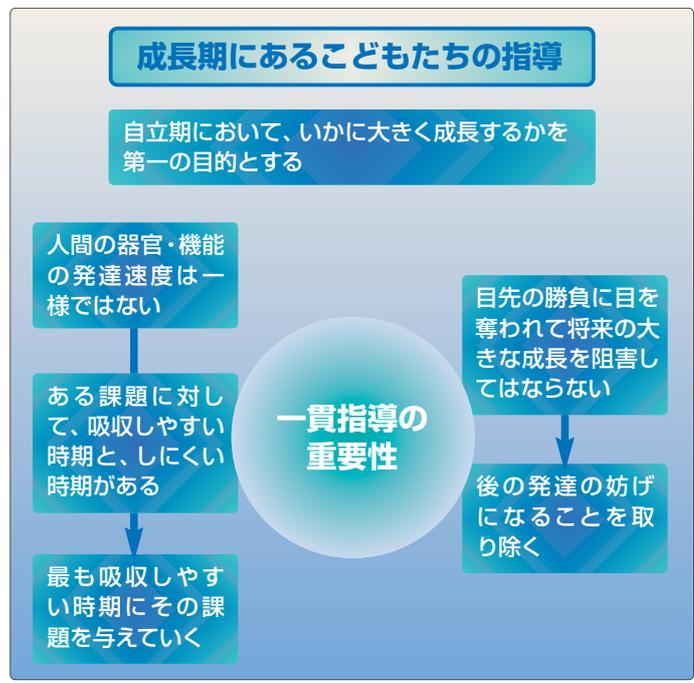
スポーツは健康な身体をつくるだけでなく、挑戦する気持ちや失敗や挫折に負けない強い心を育みます。また、大勢の仲間やコーチと接する中で、協調性やマナー、思いやりの気持ちなど社会性を養う一助ともなります。スポーツの素晴らしいところは、そういった人間として重要なものを“楽しみながら自然に涵養できる”ところではないでしょうか。ですから、我々大人たちが積極的に子どもたちにそういった機会や環境を与えることが重要だと考えています。

JFAはこのプログラムを拡大する一方で、保護者や指導者の皆さんを対象にしたハンドブックも多数制作しています。また、2007年度からスタートした「JFAこころのプロジェクト」も全国各地で展開し、サッカー選手をはじめ、子どもたちの憧れである各種スポーツ選手が、子どもたちに夢を持つことの素晴らしさ、それに向かって努力することの大切さを伝えています。

こういった様々な取り組みを推進めながらそれを多くの人々と共有し、子どもたちの健やかな成長に寄与していきたいと願っています。

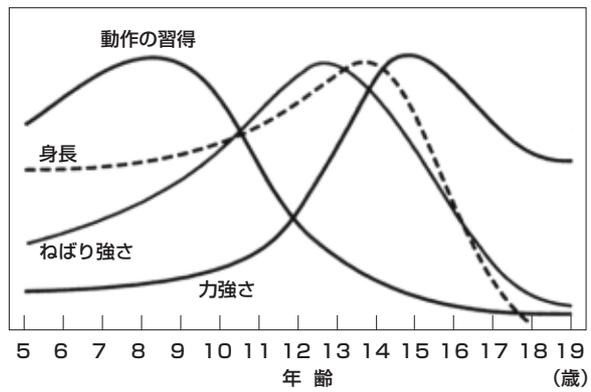


こどもは小さな大人ではありません。
発達段階に応じた働きかけが重要です。



こどもは小さな大人ではありません。人間は一直線上にまっすぐ同じように成長していくわけではありません。大人とは全く違った心理的、生理的、身体的特徴を持っています。そしてその特徴が年齢を重ねるごとに変化しているのです。

発達段階に応じた環境を与えてあげることが大切です。



発育・発達のパターン (宮下、1981年)



現代のこども事情

時代の流れの中でこどもたちを取り巻く環境も随分変わってきました。

外遊びの減少 集団遊びの減少

昔 鬼ごっこ、木登り等の外遊びが中心。グループ(年齢、性別の違った仲間)遊びの中で、喜び、熱中、成功、失敗が原動力となって、からだ、精神、創造性、判断力、社会性が育てられました。

今 テレビ、ビデオ、コンピュータゲーム等の室内でかつ少人数(同性、同年齢)での遊びが台頭。リセットして何度も繰り返すことのできるゲームには悔しさや痛みを感じる場面がありません。時間や内容も大人がコントロールしなければなりません。



家庭環境の変化 しつけの低下

昔 兄弟も多く、縦の組織がはっきりした大家族でした。全員での食事の機会を通じて、家庭内でも日常的に競争や協調が必要とされていました。また、こどものしつけに対する親の責任は重いものでした。

今 少子化によって、兄弟が少なく、個室が与えられる等、家族の間での刺激が少なくなりました。ひとりのこどもに対する親の期待が大きかったり、自分の基準でこどもに接するため過保護になったり、逆に放任になってしまうケースも出てきました。



強制されない 自由なスポーツの減少

昔 こどもたちが空き地や広場でボールを蹴ったり野球をしったりしていました。そこでは強制のない自由な遊びとしてのスポーツが展開されていました。

今 空き地や広場の減少と、交通事情の変化にともなって、自由な遊びの延長のスポーツからクラブでのプログラム化されたスポーツに変わってきました。



他人への無関心 “教育力”の低下

昔 社会的意識が高く、年代を超えた交流やつながりがありました。学校の先生も責任を持って、こどもに厳しく規律やモラルを指導する環境がありました。

今 (諸事情がありますが)注意したり、叱ったりする人が特別視され、他人のこどもに無関心な大人が増えてきました。規律やモラルを指導する場が減り、学校の先生も厳しく接することが難しくなってきました。



早期の専門化 偏った取り組み方

昔 日常生活の中で、時間的な余裕もあり、いろいろなことを体験し、学ぶこともできていました。こどもに対して専門化に向けて何かを働きかける風潮ではありませんでした。

今 何かに真剣に取り組むこども、全く何もしないこどもに二極化されてきました。過度に早期からひとつのことばかりに大人顔負けの時間や労力を割いて取り組むことで、心身の負担を招くようなケースも見られるようになってきました。

こどもたちが危ない! こどもたちに起こっている変化

》》こどものからだ

近年、こどもたちの社会・生活環境が大きく変化しています。室内遊びやテレビ、ゲームが圧倒的に増え、こどもたちの活動量が劇的に減り、そのことがこどもの心身に深刻な影響を与えています。

こどもたちの体格は向上しているものの、**基礎的な運動能力は男女ともほとんどの年齢段階で依然として低下傾向**が続いています。

全身を使って思い切り遊ぶことがなくなったことで、**背筋力が低下**しています。正しい姿勢をとることができず、教室の机に伏せたり椅子からすべり落ちそうになって座っている子もいます。体温の変動にも変化が現れています。肥満児も急増し、**生涯にわたる健康障害が懸念**されています。

学校の朝礼中に倒れるこども、机に突っ伏すなど教室でちゃんと席に座ることができないこども、常に疲労を訴えるこどもなど、必ずしも数値に表れないものの、あきらかに以前とは異なるこどもの状況が見られます。

こどもたちの裸足の足型をとってみると、最近の

こどもは、足の指が映らない、すなわち足の指の発達が不十分な例が多く見受けられます。歩くことが圧倒的に少なくなったことによると考えられます。**足裏の不安定性**もまた**こどもの体力や運動能力、柔軟性やバランス、敏捷性等の低下と大きく関係し、精神にも影響**を与えています。

さらに最近では、手先の不器用さをはじめ、こどもの生活に必要な能力の低下までが心配されるようになってきています。

指を使う精密な動作は、脳の運動中枢と指の骨格筋との協応作用で行われ、そのためのプログラムは6歳くらいまでの刺激によって確立されると推察されています。すなわち、**ある必要な時期に適切な刺激を与えないと、それらのプログラムが適切に形成されなくなってしまう**ということの意味します。からだの多くの機能に、このような時期が存在し、「**臨界期**」と呼ばれ、重要視されています。それを逃さないためにも、こどもの時期に外で思い切りからだを動かして遊ぶことが重要です。



現代社会が失ったものを スポーツ、外遊びは持っている!

日本における「子どものからだの調査(実感)」の結果
「最近増えている」という“実感”ワースト10(%)

1978年	① 背中ぐにゃ	44.0
	② 朝からあくび	31.0
	③ アレルギー	26.0
	④ 背すじがおかしい	23.0
	⑤ 朝礼でバタン	22.0
	⑥ 雑巾がしぼれない	20.0
	⑦ 転んで手が出ない	20.0
	⑧ なんでもないととき骨折	19.0
	⑨ 腹のでっぱり	19.0
	⑩ 懸垂ゼロ	18.0

1990年	① アレルギー	87.3
	② 皮膚がかさかさ	72.6
	③ すぐ「疲れた」という	71.6
	④ 歯並びが悪い	69.8
	⑤ 視力が低い	68.9
	⑥ 背中ぐにゃ	68.7
	⑦ 腹痛・頭痛を訴える	65.5
	⑧ 転んで手が出ない	62.3
	⑨ 症状説明できない	61.9
	⑩ ちょっとしたことでも骨折	58.4

2005年	① アレルギー	82.4
	② 背中ぐにゃ	74.5
	③ 授業中、じっとしていない	72.5
	④ すぐ「疲れた」という	69.9
	⑤ 皮膚がかさかさ	65.7
	⑥ 症状説明できない	63.1
	⑦ 視力が低い	63.1
	⑧ 平熱36度未満	60.1
	⑨ 体が硬い	60.1
	⑩ ボールが目にあたる	59.8

『子どものからだと心 白書 2005』より

》》》教育環境

学校現場でのいじめ、登校拒否、学校内暴力、学級崩壊等の問題は、依然として多く存在し、大きな社会問題となっています。その背景には、家庭・学校・地域社会のそれぞれの要因が複雑に絡み合っており、こどものこころ、からだに大きな影響を与えています。

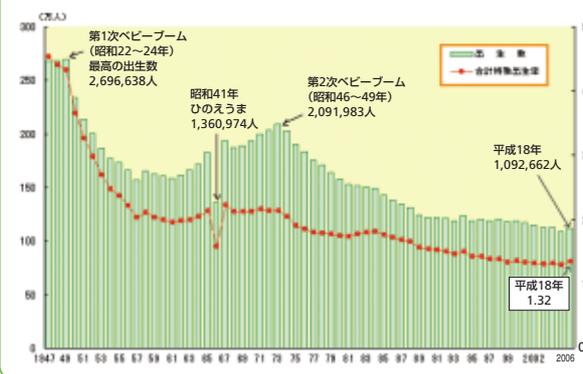
また、学校の朝礼中に倒れるこども、机に突っ伏すなど教室でちゃんと席に座ることができないこども、常に疲労を訴えるこどもなど、必ずしも数値には表れないものの、あきらかに以前とは異なるこどもの状況が見られます。

》》》社会環境

少子化

出生数の推移をみると、1970年代前半には、一年間に生まれてくるこどもの数はおよそ200万人前後でしたが、近年では110万人を下回るまでに減少を続けています。

出生数の推移



資料：『人口動態統計』厚生労働省大臣官房統計情報部

少年犯罪の増加

平成15年中、非行少年として検挙・補導した少年は15,998人で、前年比943人(6.3%)増加し、刑法犯少年、特別法犯少年、ぐ犯少年の何れも増加しています。

H15年概況

- ① 全刑法犯に占める少年の割合は、4人に1人
- ② 凶悪犯が増加
- ③ 街頭犯罪では少年が約5割
- ④ 少年の薬物乱用は予断を許さない状況
- ⑤ 女子非行が増加傾向

『警視庁ホームページ』より

日本サッカー協会は 実行しています

We Start
Kids'
Programme
JAPAN FOOTBALL ASSOCIATION
!!



》》JFAキッズプログラム

プレジデント・ミッション

JFAは、「普及」と「強化」の両輪を柱とした日本サッカーの基盤確立のため、また『JFA2005年宣言』の実現に向けて定めたプレジデント・ミッションを通じて、サッカーに携わるあらゆる人々が、楽しみ、幸せになれる様、サッカーの普及に努めています。

幼児年代からの普及・育成体制の整備

心身、特に神経系の発育発達がめざましい幼児期や小学校低中学年代において、多くの子供達に身体を動かすことの爽快さやスポーツの素晴らしさを体感してもらいながら、サッカーの普及・浸透更には人材の育成を図ります。この年代(U-10・U-8・U-6)を「キッズ」と称することとし、各都道府県にて普及・育成に関する活動を積極的に展開し、日本独自の普及・育成体制を整備、「JFAキッズプログラム」として強力に推進しています。

- ① 「JFAキッズプログラム」の全ての市区郡町村内での全域展開の推進
- ② 自主採算運営を基盤とした事業運営への移行促進
- ③ 「支援制度」の推進
- ④ 「対象FA」ジョイントミーティングの実施

<支援制度対象FA取り組み事項>

- ① 指導者養成
- ② 巡回指導の実施
- ③ イベント
- ④ 普及活動
- ⑤ 関連団体連携
- ⑥ 医科学／栄養学・調査／研究・施設
- ⑦ キッズの取り組みを中心とした地域に根差した活動推進
- ⑧ キッズの取り組みを中心としたサッカーファミリー拡大
- ⑨ キッズの取り組みを中心とした事業規模拡大
- ⑩ その他都道府県協会独自の取り組み





1 キッズサッカーフェスティバル

2003年度のプログラム開始より、U-6/U-8/U-10へと展開され、既に全国各地で多くの子どもたちが参加しています。毎年10万人以上の子どもたちが参加しており、保護者の方々からも複数回開催や継続開催を望む声が多数寄せられています。

外で思い切りからだを動かす経験、集団での活動、年代を超えて多くの人と接するすばらしい機会となります。



2 ファミリーフットサル

2003年度のプログラム開始より、既に全国各地で多くの家族が参加。ワールドカップを契機にサッカーに関心を持った人々、これまでフットサルに触れたことがない人に対しても家族の触れ合いの場、身近なスポーツ活動の機会となることを目的とし、ファミリーフットサルを開催しています。そして、参加者にとって「朝ごはんが作戦会議」になることを目指しています。



3 グリーンカード

サッカーでは、警告はイエローカード、退場はレッドカード。やっではないけない行動ばかりを探してはいませんか。

そんなネガティブなフィードバックばかりでなく、フェアプレーに「グリーンカード」でポジティブなフィードバック。

自己申告、決定をすぐに消化して次の行動に移ることができる、そして決して仕返しはしない。そんな気持ちをこどものうちにこそ伝えていきます。

また、こどもの成長を促すうえで、「褒める」ことの重要性は非常に大きいものです。フェアな精神、フェアな行動を、認め褒めることで促進します。

罰則で縛るのではなく、自分自身へのフェアな精神からの行動を。そうすることで、フェアな社会へと働きかけていきます。

良いことを褒める！
↓
真のフェアプレー精神を





4 指導者養成と巡回指導

各地域で指導者(キッズリーダー)養成を積極的に行い、こどもスポーツについて知る大人を一人でも多く増やし、こどもたちがより日常的にからだを動かすことができるよう、活動をしています。

また、都道府県サッカー協会が中心となり、地元のクラブや指導者と連携して、幼稚園や保育園等への定期的な巡回指導を行い、こどもたちに外遊びの楽しさを体験してもらっています。



5 こどもたちへ、世界への夢を与えたい!!

サッカーは世界につながるスポーツ。
日本のすそ野全体が世界につながっています。
常に世界基準で夢を持ってもらうことができます。
生涯にわたり、サッカー、スポーツを介していろいろな形で世界につながる夢や情熱を持ち続けてもらいたいと思っています。

6 その他にも…

●Jリーグアカデミー

Jリーグアカデミーでは、Jクラブ内に育成センターを設置し、**地域に根ざした存在として地元のさまざまな連携を保ちながら一貫指導**を行っています。日本サッカー協会では、このJリーグアカデミーと連携し、全国にキッズに対する取り組みを広げていきます。

●エリートプログラム

心身ともに変化が大きく難しい年代とされる13歳、14歳。この年代に対して、特に重要な年代と位置づけ、2003年度よりエリートプログラムを立ち上げ、サッカーの場だけではなく、**人間的な面も含め、世界基準を目指した指導**を行っています。

さらに2006年より、寄宿生、中高一貫教育のJFAアカデミー福島を開校しました。

●保護者への働きかけ

特に低年齢では保護者の影響が非常に大きく、こどもたちに過度のプレッシャーを与えるケースも残念ながら多々生じています。低年齢に関しては、家庭の協力なしに、学校やスポーツの場だけで良い環境をつくっていくことはできません。保護者に**良きサポーター**となってもらうために、パンフレット、ハンドブック等を作成して、積極的に働きかけています。

早期専門化を目指したものではありません。
こどもに即したスポーツ、サッカーをすることで、
こどもたちが心から楽しむことができ、
こどもたちの心身の健全な成長を促します。

日本の将

田嶋 幸三 ● (財)日本サッカー協会 専務理事

こどもたちの成長は、待ってくれません。何もしないでいると、その時間を通り過ぎたこどもたちは、良い環境を与えられずに過ごすことになってしまいます。

発育発達に応じて、最も適した年代に適した内容をこどもたちに提供していく、これが私たちサッカー協会の考え方です。U-6から始まりU-16までの指導指針を2歳刻みでつくりました。こどもたちは刻々と成長していき、それぞれの年代で異なる特徴や適性を示します。一括りに考えることはできません。

我々のモットーは、すぐに始めることです。このJFAキッズプログラムの他にも、ファミリーフットサル、レディース/ガールズサッカーフェスティバル等、2003年から始めています。

世界もまた、こどもたちに注目し、重視しています。こどもたちが、日本の未来、世界の未来を担います。

We Start
Kids'
Programme
JAPAN FOOTBALL ASSOCIATION
!!

来のために

... A bright future lies ahead of Japan



発行

財団法人 日本サッカー協会

〒113-8311 東京都文京区サッカー通り JFAハウス
TEL.03-3830-2004 FAX.03-3830-2005

編集

財団法人 日本サッカー協会

プレジデント・ヘッドクォーターズ (PHQ)・技術委員会テクニカルハウス

制作協力

有限会社 ビーチ アンド ダムズン

印刷

アサヒビジネス株式会社



- 本紙掲載のレポート、写真、図表などの無断転載を禁じます。
- 詳しく内容を知りたい方は、JFAキッズ (U-6)・(U-8)・(U-10) 指導ガイドラインをご参照ください。
- 写真提供 Jリーグフォト(株)・長岡 博史・福島県 広野町・大分県 中津江村・島根県 出雲市
- イラスト ヨシザワ マサトモ
- 発行日 2009年4月1日